

芥川文学における〈伝記〉の問題とスウィフト受容一側面 ——日本近代文学館・山梨県立文学館の旧蔵書調査を通して

小 澤 純

1. はじめに

日本近代文学館、山梨県立文学館、藤沢市文書館を中心に芥川龍之介（および葛巻義敏）の旧蔵書を調査していると、芥川は古今東西の文学作品のみならず、文学者や芸術家をめぐる作家論的、評伝的な書籍を多く持っていたことに気付かされる。また同時に、芥川自身の作品にも、最晩年の「西方の人」「続西方の人」（「改造」一九二七・八、九）の「クリスト」に至るまで、特定の人物に焦点を絞った文学作品や評言を多く残している。芥川は学生時代に大塚保治の講義を通してディルタイ [1833-1911] による人物研究の方法に耳を傾け、また「個性」を重視する新カント派西南学派の歴史記述に関心を持ちつつ、いつか師の漱石のように作家自身が作品と関連付けられながら論じられていくことに自覚的だったように思われる⁽¹⁾。その意味では、活字化された文学作品のみならず、入稿原稿や草稿類を介して、作家像が後世に紡がれていく素材になることに作家が目を向けていた可能性はあるし⁽²⁾、蔵書の書き込みや折れ目もまた、たとえ作家が意識していなかったとしても、他の文学者や芸術家、歴史的人物への作家の目の向け方、あるいは自身への向けられ方について、暗に語っているのではないか。芥川が「クリスト」を「万人の鏡」に喩えた『聖書』を筆頭に、作家論や評伝など、伝記的な要素が強い蔵書から、僅かばかり

でもそうした傾向を読み取ってみたい。

本稿では、第6回近代作家旧蔵書研究会（オンライン、二〇二三・一〇・二三）での口頭発表「芥川文学における〈伝記〉——日本近代文学館・山梨県立文学館所蔵資料より」で取り上げた調査結果を簡潔にまとめつつ、特に芥川におけるスウィフト受容の一側面について詳述したい。

2. アーノルドのハイネ評、ベックリーン、レーニン

日本近代文学館「芥川龍之介文庫」【A11】Arnold, Matthew *Essays in criticism, 1st ser.* (London Macmillan, 1911. Preface: 1865. (Macmillan's new shilling library)) を調査した。芥川の初期作品「羅生門」（「帝国文学」一九一五・一一）を「新思潮」同人の成瀬正一に批判されたことに対する作品擁護の英文メモ「Defence for "Rasho-mon"」中に見える「"moral of philistine"」という語句については、宮崎由子が、マシュー・アーノルド由来であり森鷗外「普請中」（「三田文学」一九一〇・六）で用いた「フィリステル」ともつながっていることを指摘している⁽³⁾。芥川旧蔵書では唯一のアーノルドの著作物であるが、「Philistinism! —— we have not the expression in English. Perhaps we have not the word because we have so much of the things.」や「Phiristine must have originally meant, in the mind of those who invented the chosen people, of the children of the light.」といった文章は「HEINRICH HEINE」の章に集中しており、前後に黒鉛筆による英単語の意味の書入れが多々あり、おそらく授業で用いられたことが推測できる。東京帝国大学文科大学英吉利文学専修で同期だった成瀬とのやりとりだったからこそ、「"moral of philistine"」

に含意された意味が汲まれることを期待していたはずである。アーノルドはこの単語がドイツ語由来であり、敬愛するハイネの価値観を通して、イギリス文壇やイギリスの精神風土にこうした俗物根性を批判する意識が醸成されていない点を踏まえ、自国及び自己批判的に同語を用いている節がある。「羅生門」「moral of philistine」と連動した「philistine」解釈については別稿を期したい。

芥川は第一高等学校時代からドイツ語を学んでいたが、日本近代文学館所蔵【A171】Cohn, Jonas *Führender Denker; geschicht-liche Einleitung in die Philosophie. 2., durchgesehene Aufl.* (Leipzig, Teubner, 1911.) には多くの単語の書入れがあり、京都帝国大学から移って来たばかりの桑木厳翼 [1874-1946] の、一九一五年春学期の授業用テキストではないかと推測できる。新カント派西南学派の俊英だったコーン [1869-1947] による哲学入門書であり、授業では第一章のソクラテスの後、プラトンを飛ばしてデカルト、スピノザ、カントを学び、フィヒテには入らなかったことがわかる。「明日の道徳」(「教育研究」一九二四・一〇) には一高の寮で同室だった藤岡蔵六を紹介しながら「私はカントを読んで居りませぬ。しかしカントの事を書いた物は読んで居ります」と述べているが、おそらく本書での学習も踏まえているだろう。また同書の扉左の余白の頁には縦書きで漢詩の一部と思われる「欲盡青春三月夢 醉吹横笛淚千行」とあるが、芥川龍之介・井川〔恒藤〕恭宛一九一五年六月二九日付書簡(月日推定)には「茫々夢幻春」を含む漢詩や、「桑木さんの試験には悲観した Begriff の価値と云ふ応用問題が出た」という一節があり、いわゆる失恋事件後の通院を経て、この試験終了後に井川の故郷・松江に旅行することが決まりつつある中での感慨を書き込んだものと思われる⁽⁴⁾。

このようなドイツ語学習を介したドイツ語文献の中で特に注目したいのが、日本近代文学館所蔵【A341】 Monskopf, Johannes *Böcklins Kunst und die Religion* (München, Bruckmann, [1905. 稿者推定]) である。「Den 20 Juni '08」という読了日と思しき書入れがあるが、1908年にドイツ語文献を芥川が読んでいた可能性はまずなく、ドイツ語で読了日を書き込む例を他に見たことがない。シールを見ると「MAX NÖSSLER & CO/BUCHANLUNG/YOKOHAMA/30 MAIN STREET」とあり、芥川が普段利用していた書店とは異なり、1908年時点で誰かが読了した古書を譲り受けたか購入したかだろう。書店は横浜にあり(原善一郎が矢代幸雄が関与した可能性もある)、「R. Akutagawa」という丁寧な署名、なおかつドイツ語文献を読む意欲を維持している時期であることから、一高から大学時代に入手していたと推測できる(ベックリーンの落書きは山梨県立文学館所蔵の聴講ノートのいずれかで見たことがあるが、再調査が必要である)。井川[恒藤]恭宛一九一三年八月一六日付書簡には「BÖCKLINに「魚の王」と云ふ絵がある 人の顔と魚の顔とを一緒にしたやうな醜怪な動物の肖像だが蛙をみると僕は必この魚の王を思ひ出す」とあり、大学入学前からベックリーンに出会っていたことは間違いない。ほとんどの書入れは語学の勉強の跡と思しき黒鉛筆での語句の抜き出しだが、6頁隣のデューラー [1471-1528] とベックリーン [1827-1901] の憂鬱をめぐる挿絵の次の頁である7頁と8頁には芥川が引いた可能性が高い赤鉛筆の傍線があり、内容に関心があったと思われる。挿絵は、アルブレヒト・デューラーの版画「メランコリアⅠ」[1514] とベックリーンの遺作「メランコリア」[1901] である。澤西祐典は芥川所蔵の大型英英辞典 *Funk & Wagnalls New Standard Dictionary of the*

English Language (New York, Funk, 1913) の「meklancholy” や “melancholic”
といった語句がびっしりと載っている頁」に折れ目がついていたことを発見し
ており⁽⁵⁾、葛巻義敏との同居が始まって以後の溝口小学〈ママ〉(芥川龍之介)
の散文詩「Melamchoria」(自筆回覧雑誌「一束之花」第一輯、推定一九二三・
一二)や「侏儒の言葉」の「仏陀」(「文藝春秋」一九二四・二)の「メランコ
リア」の一語、そして最晩年の作品群の「憂鬱」「憂鬱」の頻出に接続していく。

そしてドイツ語を熱心に学んでいた学生時代まで遡ることで、「鼻」(「新思潮」
一九一六・二)との関連が見えてくる。「鼻」は、典拠には登場しない「鏡」
を用いて禅智内供の思い悩む姿を巧みに表現していくが、入稿原稿においても、
「内供は、かう云ふ時には、ため息をついて」の「ため息をついて」に抹消線
を入れ、「鏡を筥にしまひながら、」へと変更し、「鏡」が登場する頻度を上げ
る⁽⁶⁾。バックリーンの「メランコリア」は、手鏡を見ながら想いに沈む憂鬱
そうな女性の横顔を捉えており、まさに「鼻」の禅智内供と重なるのである。
鼻が短くなった後に周囲に晒はれた後には、「愛すべき内供は、さう云ふ時
になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五
日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる
昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである」。一般的に「普賢の画像」
には白い象の鼻が描かれているので、喪った自分の長い鼻の幻像を目で追っ
ているとも解釈できるが、「ふさぎこんで」という箇所注目したい。漢字を当
てれば「塞ぎ込む／鬱ぎ込む」であり、過去の自己像と他者の視線の係り
をめぐって憂鬱(メランコリー)に陥っている状態と言えよう。「鼻」の第一の
読者に想定されていた漱石も鏡を効果的に用いた作家であり⁽⁷⁾、そうした作

家論的な視座からも、巨匠デューラーの象徴性と重ねられるベックリーンの芸術性や宗教観を扱う本書は注目に値する。

山梨県立文学館所蔵【登録番号 110128916】Levine, Issac Don. *The Man Lenin*. (New York, Thomas Seltzer, 1924.) は、概要は所蔵目録によって知られていたが⁽⁸⁾、傷みがひどかったためか閲覧不可となっていた資料である。二〇二二年一月以降、同館のデジタルアーカイブに本書の全ページの画像が収められ（二〇二三年度からは閲覧不可だった芥川旧蔵書全冊がデジタル画像で確認可）、初めて調査することができた（アンカット本だが 202-204 頁、205-207 頁が未開封のため画像なし）。巻頭には「The major part of this book was compiled from official Soviet publication.」、*「The book grew out of a series of articles contributed to the Hearst Press in America.」*とあり、アメリカのメディア王ハースト [1863 - 1951] のジャーナリズムの中で書かれた記事から成る。本書はレーニンの死の直後に刊行されており、遠方からレーニンおよびソヴィエト連邦を眺めているような距離感がある。目録で 51 頁に「What a comedy ——」といった書入れや、59 頁の「*“Revolution is an art,”*」に朱鉛筆で下線があることは知られていたが、どのような文脈において芥川が注目していたのか確認することができる。今回の調査で三〇箇所以上の傍線が見つかったが、本書については今後、丁寧な解析が必要であろう。書き入れや下線周辺からは、祝祭状態の革命の緊迫した現場で兵士を含む民衆の心を掌握していくレーニンの胆力や、一方、文学・芸術への関心は薄かったことを示すエピソードに芥川が興味を持ったことがわかる。

最晩年の芥川は、その死から数年しか経っていないレーニンを作品内で取り

上げていく。「或阿呆の一生」（「改造」一九二七・一〇）の「三十三 英雄」にある「君は僕等の東洋が生んだ／草花の匂のする電気機関車だ——」といった自作詩の評言の典拠は、本書から発見することができなかった。しかし例えば芥川の自宅にも届いていたであろう布施勝治の署名記事「再びレーニン氏と語る——日露関係の前途を楽観す」（「東京日日新聞」一九二〇・六・一〇）には「東洋豪傑」や「電力応用」の文字が躍っており、芥川が、レーニンという同時代の人物を捉えていくために複数の内外のジャーナルを参照していたことは確かだろう。いずれにしても、本書は隣国で起きた革命を象徴する人物の一生を扱っており、磯田光一のように「西方の人」と昭和前期の政治運動の波長を二重写しに読むとすれば⁽⁹⁾、「The last chapter are an attempt at a criticism of Lenism.」と巻頭にことわる本書を、例えば同じく山梨県立文学館所蔵のLeibknecht, Wilhelm *Karl Marx Biographical Memoirs*. (tr.by Ernest Unterman. Chicago, Charles H. Kerr&Company, 1901) や藤沢市文書館で発見された Étienne BUISSON. *LES BOKCHÉVIKI*(1917-1919) (PARIS LIBRAIRE FISCHBACHER, 1919.) と突き合わせることで、この三冊の書籍の移動に関わった葛巻（や「驢馬」に集った中野重治や堀辰雄たち）の視点から考えることもできる⁽¹⁰⁾。大学時代に触れた大塚保治経由の「類型」（典型）的な認識によって無数の「クリスト」を同時に照らし出す「西方の人」「続西方の人」と、作家が作家自身の来歴を独り綴り続ける「或阿呆の一生」とが互いに「万人の鏡」として絡み合いながら、芥川文学における〈伝記〉的な諸言説の意味作用は、その一回限りの「死」（およびセンセーショナルな報道、それに続く全集の編纂）によって、大きな転換を迎えていくのである。葛巻の近傍にいた坂口

安吾による芥川の「死」という出来事への抗いや⁽¹¹⁾、太宰治による芥川の「死」を再演するパロディは⁽¹²⁾、まさに芥川の〈伝記〉が多くの読者によって参照可能になった後に、遅れて実践されるべき営為であった。

3. 漱石「スウィフトと厭世文学」の影響と「蛙と女体」

日本近代文学館所蔵の【A523】Swift, Jonathan *Gulliver's travels* (London, Richards, 1902. Reprinted 1904. (The world's classics)) から、新たな書入れが見つかった。芥川の旧蔵書にはスウィフトの著作は3冊あるが、最も持ち運びやすい小型サイズ（縦153ミリ、横95ミリ、幅28ミリ）の1冊であり、あくまで多くの書入れを調査しているの推測であるが、書入れの字体と勢いのある書き振りから、学生時代かその前後である可能性が高い。新潮社記者（中村武羅夫か）との一問一答録「芥川龍之介氏との一時間」（「新潮」一九二五・二）では、愛読書はほとんどないとしながら、「唯自分が割合に何度も読む本から云へば、あのガリバーの旅行記です。あの書物は昔から僕は好きです。アレは何度読むか分からない位読むです」と答え、「唯悪辣な風刺が非常に元気附ける」ことを伝えている。

まずは73頁21行目「Whenupon I made a sign」～28行目「it best to do.」の右側に黒インクで縦の傍線があり、「ウマイウマイ」と書入れがある。ジョナサン・スウィフト／高山宏訳『ガリヴァー旅行記』（研究社、二〇二一・一）に照らし合わせると、以下の箇所である。紙幅のこともあり同じ要領で高山訳のみで他の箇所もピックアップするが、芥川による傍線の範囲の途中の訳文を省略する場合は「…」を用いた。本節では、芥川と漱石のスウィフト受容にあ

る、偶然のみと断言できないような共通要素を指摘した上で、芥川のスイフト受容の一側面について考えていきたい。

【A】 pp73（黒インク書入れ「ウマイウマイ」・黒インク傍線）

そこでわたしは手を地べたに置いてくれるように身振りで伝え、財布をとって口を開き、中身を農夫の掌中にぶちまけた。四ピストールのスペイン金貨が六枚、二、三十枚のじゃらじゃら小コインとともに出てきた。農夫は小指を舌先で湿らせると、大きな金貨を一枚、一枚手にとったのだが、何なのかは依然全くわからないようだった。農夫は全部また財布にしまえ、そして財布をポケットにしまえという身振りをした。何度もプレゼントしようとはしたが、結局言われる通り、元通りにしまうしかないのであった。

【B】 pp74 - 75（黒インク書入れ「ヨロシ」・黒インク傍線）

それから御主人がこっちの儂の皿の方に来いと手招きする。それで卓上を歩き始めるのだったが、寛容な読者御察いただき、仕方ないと仰有っていただけと願うが、なにしろずっとびっくりし通しだったせいでパンのかけらに蹴つまずいてしまい、うつ伏せにばったり倒れてしまった。怪我はなかった。わたしはすぐに立ち上り、周りで良き人々が本当に不安そうに見入っていたものだから、（礼儀と弁えて脇に抱えていた）帽子を頭上に振り、船乗り流の万歳を三唱、こけても何の怪我もないことを示した。我が主人（今はそう呼ばないの無理があろう）の方にも進もうとしたら一番年少の息子で我が主人の隣に坐っていた十歳ぐらいの悪戯小僧がいきなり私の脚をつかん

で、私を空中高く撮みあげた。わたしは通身ぶるぶるふるえた。[…] 父親はわかってくれ、馬鹿息子は再び食事についた。わたしは息子の所に行って手に接吻すると、我が主人はその手を取り、その手でわたしをやさしくなでさせた。

興味深いのは、以上の場面については、夏目漱石も『文学評論』（春陽堂、一九〇九・三）の「スウィフトと厭世文学」で注目していたことである。帝大英文に入ったばかりの芥川は井川恭宛一九一四年一二月二一日付書簡にて、芥川は大学の講義の物足りなさを訴えながら、「夏目さんの文学論や文学評論をよむたびに当時の聴講生を羨まずにはゐられない」と綴っており、この時期までに『文学評論』に何度か目を通していたと思われる。後に芥川は、芥川龍之介編『近代日本文芸読本』第四卷（興文社、一九二五・一一）に「スウィフトと厭世文学」から「風刺家としてのスウィフト」前半部を採録している。「スウィフトと厭世文学」において、スウィフトの「いやに政治的である」点に不満を洩らす文脈ではあるが、「今少し平民的に社会的方面から筆を執つて貰ひたい様な気持ち」で、「大人国では漂着するや否や、畠の中で百姓に捕まつて居るから、これは面白いと思ふと、直ぐ王様の所へ持つて行かれる」とまとめている。漱石は第二篇「大人国」の冒頭部分が「面白い」と記したが、芥川も漱石同様に、この後に引用する二箇所も含め、ガリヴァーが百姓と絡んでいる場面に「ウマイウマイ」「ヨロシ」と快哉を送っており、王族や貴族が登場してくる場面に書入れはしていない。

【C】 pp76 - 77 (黒インク傍線)

食事もあり間近、乳母が一歳の乳飲児を抱いて入って来たが、赤子はすぐにわたしを目にとめ、それこそロンドン橋からチェルシーまで響きそうな叫び声をあげ始めた。〔…〕が何をやっても奏功しないので乳母は、乳を吞ませる最終手段に訴えた。白状するが、この乳母の乳房を目の当りにしてしまっただけで感じた以上のおぞましさのものは空前にして絶後である。好奇心強い読者にその大きさ、その形、その色をわかって貰いたくも、比較に引き出せるものが、ない。六フィートもせり出していて、円周も十六インチをくだらない。乳首だってわたしの頭の半分ほどであって、乳房も乳首も点々だのぼつぼつだの、しみしみだのいろいろありすぎて何の色とも言いかね、これ以上嘔気を誘うものは珍しいだろう。わたし、乳母をえらい間近に見て了った。乳をふくらませるのによい位置に坐っており、わたしはテーブルの上に立っていた。このことでわたしはイングランドの女性たちは綺麗な肌をしているんだなと改めて思った。彼女らが見た目に美しいのは彼女らが吾々と同じ体の大きさをしているからなんだ、と。拡大鏡でもなければ彼女らの欠陥は見えないのだ、と。実験してみると、これ以上ないほどの白い、滑らかな皮膚が実はいかにごつごつして目粗く、色も悪いものか知れるのである。

以上は「大人国」の女性の肌を間近で見ることによってそのグロテスクさに辟易とする場面であり、直前の「ウマイウマイ」「ヨロシ」からも、芥川が面白がっていることがわかる。そしてこの場面は、漱石が「此奇抜なる想像を更に写實的に描き出す想像に感心する」一例として挙げているのである。

以下、「スウィフトと厭世文学」から引用する。

スウィフトが写実的の想像をする時は屹度数字を担ぎ出す。甚しい所になると文学書を読んで居る様な気持がしない位精密である。大人国の女の乳房を記載して、“It stood prominent six feet,and could not be less than sixteen in circumference. The nipple was about half the bigness of my head,and the hue,both of that and the dug,so varied with spots,pimples,and freckles,that nothing could appear more nauseous.”（其高さは六呎にも余つて、周囲も十六呎よりも少ない筈はない。乳首は余の頭の半分もあつて、乳首も乳房も汚点やら雀斑やら疹子やらで色が變つて居る。世にこれ程胸の悪いものはあるまい。）と云ふて居る。普通の女の乳首を虫眼鏡で覗いた事があるのかも知れない。

ここでは「虫眼鏡」を用いたようなスウィフトの「精密」さに漱石は驚いている。ただ直後に、「以上の諸例からしてスウィフトの想像は詩的と云ふよりも寧ろ散文的」、「散文的と云ふよりも寧ろ事實的」だとして、その傾向への物足りなさも指摘している。漱石によれば、「事實的の極は遂に科学的になる」が「但し数学的に精密になるという丈」で、「真理を予知する様な詩に近い想像を指すのではない」。漱石は他の箇所では、「通篇諷刺的精神に満ちて、絶えず刺激を受け、間の延びた所は少しも無いが、それと共に所謂美しい様な要素が欠けて」おり、「単に人事的に云つて詩に近い場面が無いのみならず、自然の享樂を表はした点が少しも無い」ことを「遺憾」としている。

興味深いのは、芥川はこの場面の直後の、ガリヴァーが便意を催しているのに女主人になかなか気付いてもらえない場面に「swift ナルカナ」と書入れしている点である。

【D】 pp78 - 79 (黒インク書入れ「swift ナルカナ」・黒インク傍線)

ひとつだけやってれば良い場合じゃなかった、しかもこっちの方は他人に替ってやって貰えやしないのだ。だからわたしは女主人に、とにかく先ずは床の上におろして欲しいのだということをわかって貰わねばならなかった。そうして貰えたが、やはり恥ずかしいのが先にたって、戸口を指差し、何度もべこべこお辞儀をすることしかできない。お人好しの女主人は首を傾げまわっていたが、やっとわたしは何をしたいのかわかってくれた。で、わたしを再び掌にとると庭に出て、そこでわたしをおろしてくれた。一方の側を二百ヤードも歩いていった。女主人には、見ないでくれ、ついて来ないでくれとお願いしてからスイバの葉の間に身を隠すと、自然という奴が絶対必要と冀うものが、あたり構わず噴き出した。

漱石が述べるようにスウィフトの作品には「所謂美しい様な要素」は皆無かもしれないが、澁澁とした諧謔味と尾籠な笑いに満ちており、特に芥川が好んだ場面であったことも頷ける。前掲の一問一答録では、記者から芥川作品には「小便」が描写されることが多いという指摘を受けて、「小人国」の「大火を小便で消して仕舞ふ」エピソードに続きこの「大人国」での「小さい植物の蔭へ行つて用を足したと云うこと」を紹介し、「全体の空想的の空気の中に、さう

云ふ事件を書かすには居られないスキフトの心持は兎に角愉快ですね」と締め括っている。また漱石はスウィフトを評価する際に「スキフトのスキフトたる所以」という言い回しを用いており、「swift ナルカナ」という評言に響いている。

漱石は、「第一に目に附くのは『桶物語』を読んでから『ガリバー旅行記』に移ると、この方が余程面白い、文学的に出来て居る」と述べ、その理由を明らかにしている。

『桶物語』に在つて教会の歴史を比喩的に、述べんと企てたるが如く、『ガリバー旅行記』に在ては抽象的真理を述べんとして居る。普遍的命題を述べんとして居る。抽象的真理を述べるのであるからして、之を文学的にするのは単に具体的に表はせば可いのである。具体的に表はす方法に就ては作者は何等の束縛を受けない。〔…〕此点から云へば尨大なる『桶物語』も遂に一部の『イソップ寓意譚』に若かないと云つても宜しい。『ガリバー旅行記』の『桶物語』に勝る点も亦こゝにある。約めて云へば、文学的な話を自由に構造し得ることゝ、其話の裏面にある主意が一般人間に共通なる利害を有することゝ成る。

ここで、漱石が『ガリバー旅行記』と『イソップ寓意譚』の共通性を挙げていることは興味深い。漱石は『それから』（「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」一九〇九・六・二七～一〇・十四）においても、主人公の代助が『イソップ寓意譚』の「蛙と牛」を例に「牛と競争する蛙と同じことで、もう君、腹が裂け

るよ」と発言しているが、芥川にも『イソップ寓意譚』と『ガリヴァー旅行記』を接続する小品「蛙と女体」（「帝国文学」一九一七・一〇）がある。

「蛙と女体」は、「蛙」と「女体」という二つの小品から成り、「女体」は後に『影燈籠』（春陽堂、一九二〇・一）に収録されており、高橋龍夫は「漱石の「夢十夜」の影響なども想定できる」⁽¹³⁾と指摘している。「蛙」では「蛙が口をきくのは、何もイソップの時代ばかりと限つてゐる訳ではない」という文言でその寓意性を示唆しているが、蛙たちが自分たちを世界の中心に据えて議論している中、「蛇も我々の為にあるのか」という難題に対して、年老いた蛙が「さうだ。蛇も我々蛙の為にある。蛇が食はなかつたら、蛙はふえるのに相違ない。ふえれば、池が、——世界が必狭くなる。だから、蛇が我々蛙を食ひに来るのである。食はれた蛙は、多数の幸福の為に捧げられた犠牲だと思ふがいい。さうだ。蛇も我々蛙の為にある。世界にありとあらゆる物は、悉蛙の為にあるのだ。神の御名は讃む可べきかな。」と述べるのである。こうした皮肉めいた結論はスウィフトとも共通するも（特にスウィフトのアイランド貧困対策案とも関わる）のだが、さらに「女体」は、「楊某と云ふ支那人」が「虱」に変わって、細君の巨大な女体に驚く小品であり、まさに漱石と芥川が『ガリヴァー旅行記』の中で注目した場面と同じ趣向なのである。もちろん「女体」は、「楊は、虱になつて始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来た」とあるように、そのグロテスクさではなく美に注目する作品であり⁽¹⁴⁾、『ガリヴァー旅行記』自体や漱石の着目点とはずれていくものである。しかしその素材を用いながら換骨奪胎していく芥川文学のスウィフト受容の変遷にこそ注目していきたい。漱石「スウィフトと厭世文学」の冒頭は「趣味」の基礎にある「好

悪」についての考察だが、芥川「侏儒の言葉」の「好悪」の項（「文藝春秋」一九二三・四）へと継承される一方、「文藝的な、余りに文藝的な」の「十二詩的精神」（「改造」一九二七・四）で「マダム・ボヴァリイ」も「ハムレット」も「ガリヴァアの旅行記」も悉く詩的精神の産物である」と主張するのは漱石による「詩に近い場面が無い」という評言への異論とも捉えられよう。最晩年の「河童」（「改造」一九二七・三）まで続くその受容の発端の一つとして、*Gulliver's travels* (London, Richards, 1902. Reprinted 1904. (The world's classics)) への書入れは注目に値するだろう。以下の第四編「フーイヌム国」への書き込みは、まさに晩年の受容へと接続する箇所だと考えられる。例えば、「裁判官のベツプ」が「職を失った後、ほんたうに発狂」したことを話者の「僕」が心配する「河童」の結末部分と共振するだろう。

[E] pp232（中央部3行の右端に黒インク傍線）

それにしても、この話にしてもそうだが、きみの今までの話は主に戦争の話ばかりだったような気がする、と師匠馬は付け足した。今一寸頭を悩んでいる別の問題がひとつある。きみはきみの乗組に法律に潰されたから国を棄てた者が何人もいっていた。そして法はどういう意味の言葉か説明してくれもしたのだが、そこでわからないのは、どの人間をも守る為に作られた筈のものに人間が潰されるというようなことがどうして起こって丁うのか理解できない、きみが法という言葉、その執行者という言葉はどういう意味で使ってるのか、君の国の現状に即して、もっとよくわかるように話して欲しい、きみらが自分はそうだと言っている理性的な動物にとっては自然

と理性こそが、何を為すべきか、何を為さざるべきかを教える十分な案内役と思われるのだが、如何。

おわりに

前号に続き、芥川龍之介の旧蔵資料を実見する中で気付き考えたことの一端をまとめてきた。最後に、書入れを実見していく際に気付いた疑問点について記しておきたい。日本近代文学館所蔵の【A126】Croce, Benedetto *Goethe* (London, Methuen, 1923. Translated by Emily Anderson) について、先行研究⁽¹⁵⁾では52頁の書入れが「コノー節ヲカシ Croce ニモ Wagner ノ素質ガ多キナリ」となっていたが、おそらく「コノー節ヨロシ Croce ニモ Wagner ノ素質ガ多キナラン」ではないかと思われる。図版を附すので、読者にも確認していただきたい。微細な差異かもしれないが、Croce のこの箇所での評価が真逆になる可能性のある記述であるため、特に取り上げた。ゲーテ「ファウスト」の登場人物ワグナーとクローチェの探究態度を重ねる感想である。これまでも旧蔵書の書入れについての研究には多くの蓄積があるが、何度も実見し検証することによって初めてわかることが、まだ潜んでいるのではないか。作家と作品及び読書場の解像度を一層上げるために、今後も旧蔵書調査から広がる研究を継続していきたい。

注

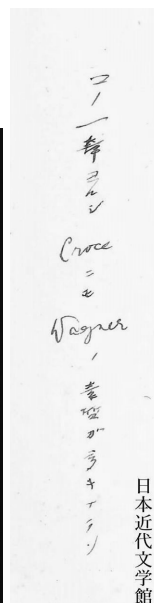
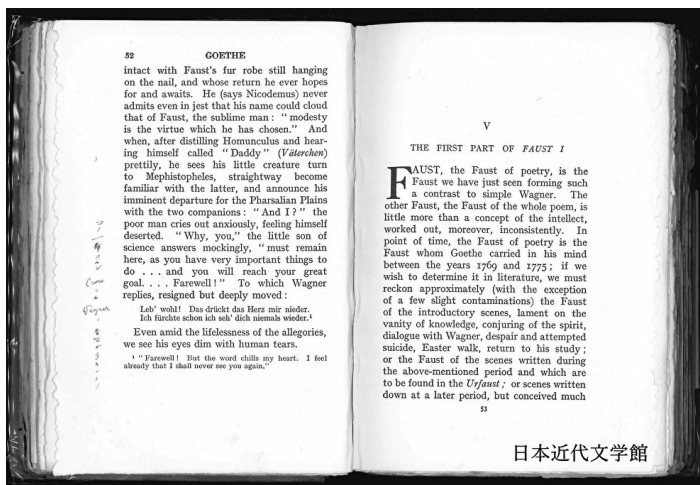
- 1 拙論「虚焦点としてのリッケルト——美学者・大塚保治と文科大学生・芥川龍之介」(関口安義編『生誕120年 芥川龍之介』(翰林書房、二〇一二・

一二)

- 2 拙論「芥川龍之介「歯車」に宿るアーカイヴの病——日本近代文学館・山梨県立文学館・藤沢市文書館の所蔵資料を関連させて」（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇一九・三）
- 3 宮崎由子「下人の「moral」——「羅生門」・『罪と罰』との比較を通して——」（『芥川龍之介研究』二〇一九・七）
- 4 章瑋氏より、漢詩の後半部は陸游の七言律詩「度浮橋至南台」の最後の二句「白髪未除豪氣在 醉吹橫笛坐榕陰」を踏まえており、その下敷きを知った上で見渡せば前半も完全に創作ではない可能性が高いことをご教示いただいた。
- 5 澤西祐典「〈資料紹介〉新資料紹介（二）日本近代文学館所蔵・芥川旧蔵書の英英辞典に挟まれていた紙片について—— Webster's International Dictionary of the English Language から発見されたメモ・辞書愛好家としての芥川龍之介——」（『芥川龍之介研究 17』二〇二三・八）
- 6 秀明大学主催『芥川龍之介展 初公開「鼻」などの完成原稿』図録（秀明大学、二〇一二・一一）参照。原稿 10 枚目（図録 7 頁）については、キャプションにあるように「中ほどで、「鏡の中」と「鏡の外」を最初は逆に書いていたことがわかる。山梨県立文学館所蔵の「草稿」は、初めから「中」「外」の順である」。草稿と完成原稿の間で「鏡」の表現が二度揺れたことが確認できる。
- 7 芳川泰久『漱石論——鏡あるいは夢の書法』（河出書房新社、一九九四・五）等参照。

- 8 飯野正仁「山梨県立文学館所蔵『芥川龍之介旧蔵洋書』目録」（「資料と研究」二〇〇〇・一）
- 9 磯田光一「芥川竜之介と昭和文学——「西方の人」を中心に」（「國文学」一九六八・一二）
- 10 拙論「芥川龍之介・葛卷義敏旧蔵書を実見する意義—山梨県立文学館・藤沢市文書館旧蔵書調査中間報告—」（「近代作家旧蔵書研究会年報」二〇二三・三）
- 11 拙論「「ファース」を"LA MORT"に感染させる——葛卷義敏「一人」と坂口安吾「風博士」の論争的布置」（「坂口安吾研究」二〇二三・三）
- 12 拙論「「狂言の神」を経巡る《間抜け》——「私、太宰治」と〈芥川〉像の諸圏域——」（「季刊 iichiko」二〇一〇・一〇）
- 13 高橋龍夫「女体（にょたい）小説」（関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、二〇〇〇・六）
- 14 石割透「芥川龍之介中期作品の位相（２）芸術家意識の定着「女体」から「戯作三昧」へ」（「駒沢短大國文」一九八七・三）が中期作品のテーマとの連続性を指摘する。
- 15 倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——英・露・独・北欧文学関係図書」（「現代文学」一九八三・六）

【図版】



〔附記〕 本稿執筆のための調査及び資料撮影では、日本近代文学館、山梨県立文学館の皆様大変お世話になりました。謹んで御礼申し上げます。